

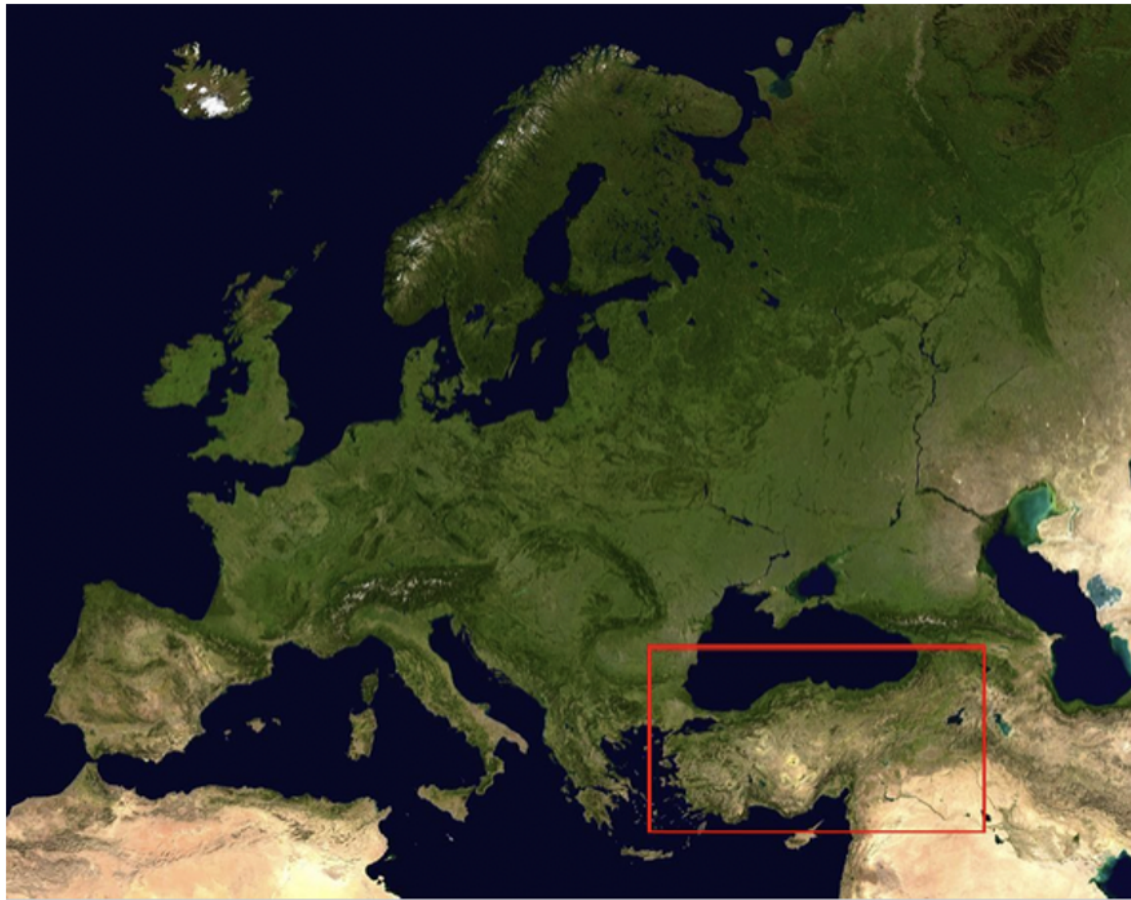
【第1編 経済 4-1】古代ヨーロッパの錬金術投資

＜古代ヨーロッパの錬金術投資＞

～金の量が戦争を制する！～

(1) 世界最古の貨幣

① 紀元前 670 年頃 アナトリア半島(現在のトルコ周辺)



ヨーロッパとアジアを繋ぐアナトリア半島
(赤く囲まれた部分)



リディア王国が「エレクトロン貨」の鑄造を開始



→エレクトロン:ギリシア語「琥珀」

cf. 中国の鑄造貨幣は紀元前 5 世紀頃から

②アナトリア半島(トルコ近辺)は、
オリエント交易圏、エジプト交易圏、
エーゲ海地中海交易圏の中心

(=三大交易圏の要衝の地)

→砂金が採取できることにも起因

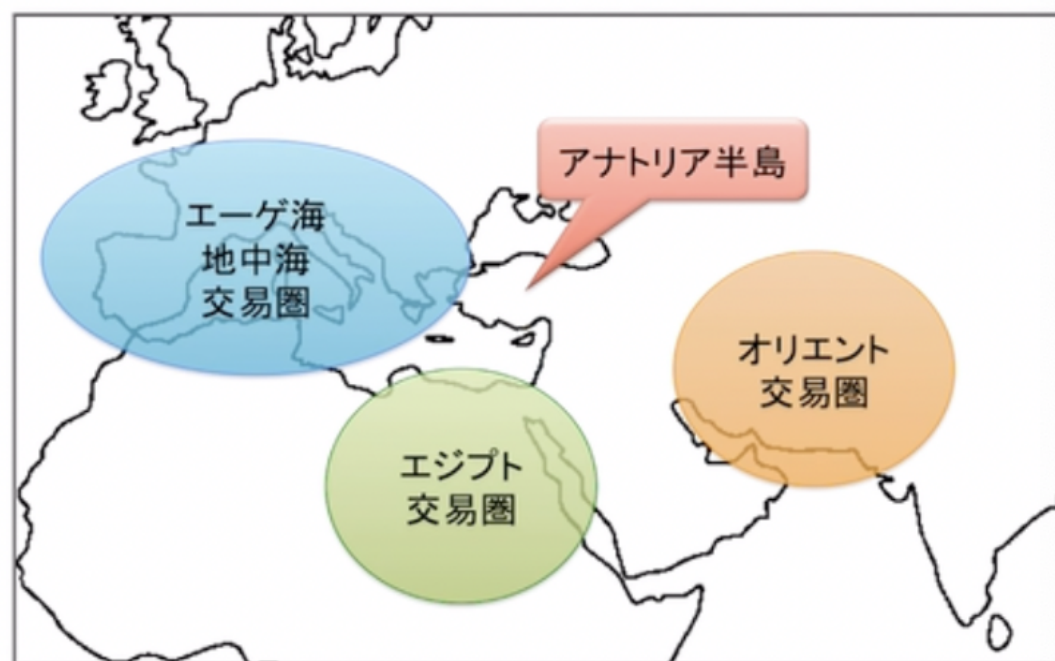
→貨幣は共通の価値基準となる。

→エレクトロン貨が誕生したことによって、

三大交易圏の取引における国際決済が可能に！

→従来の「物々交換」や「秤量(ひょうりょう)取引」に代わって、

貨幣が取引を効率化し、取引量が飛躍的に増えた！



(2) アケメネス朝ペルシア(イラン周辺)の誕生

→紀元前六世紀にオリエント圏にて

→ダレイオス 1 世がダレイオス金貨を作り始める(不純物 3%以下のとても良質な金貨)



(3) GSR (Gold Silver Ratio) : 金と銀との交換比率

① アケメネス朝ペルシアの GSR → 1:13 = 金:銀

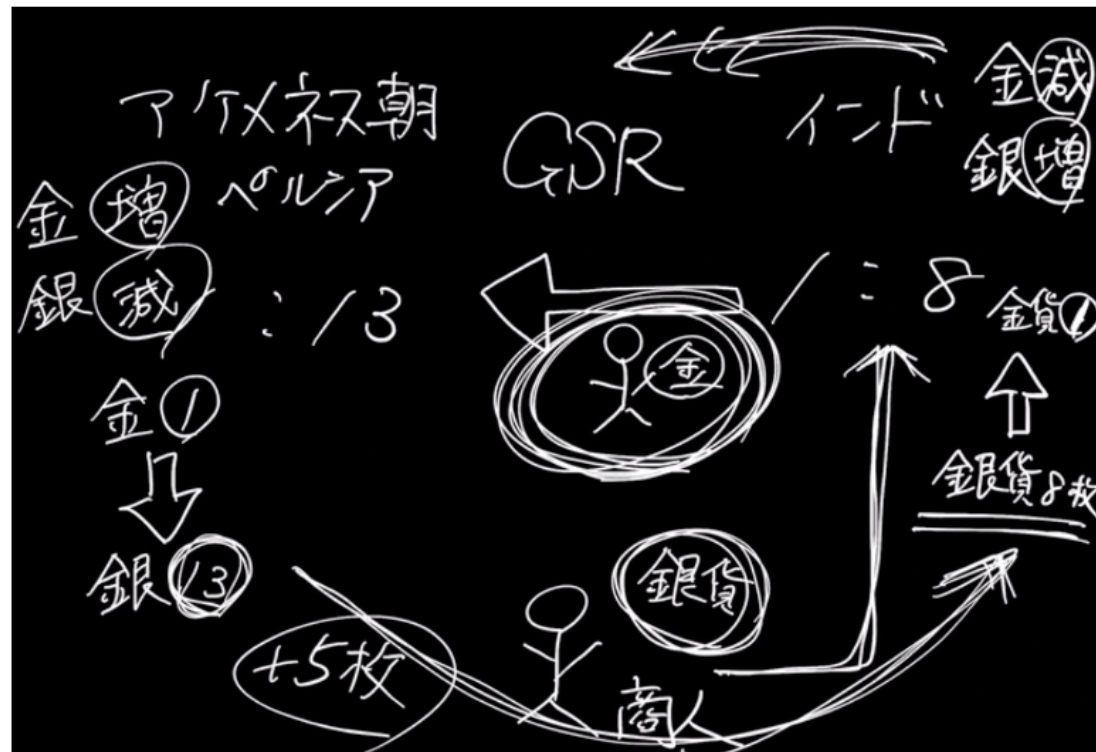
cf. インド → 1:8

→ ペルシアの方が「金高・銀安」だった！

→ インドの金が減っていく

→ ペルシアの金は増えていく(国家の信用力を高める好機であった！)

→ ペルシアの銀貨が減るのは小口決済には不便



②ギリシア GSR=1:14

→ペルシアとほぼ同じ(金高・銀安)

・6世紀半ば ギリシアのアテネ→大きな銀山の採掘(ラウレイオン銀山)→



ドラクマ

「掴む」という意味
銀本位制の独自通貨

→大きな銀山を有するアテネは、通貨供給都市として台頭！

→しかし、銀の供給量が増え、ますます「金高・銀安」に！

(4) 金と銀の「錬金術」が戦争の火種に...！

ギリシアによる銀の大量採掘により、急激な銀安が進行する



ダレイオス金貨が流出

ギリシア

アケメネス朝ペルシア

金本位制を採用しているペルシアは打撃を受ける

→ペルシアとギリシアの対立が強まってくる

①イオニア地方をめぐる軍事衝突 マラトンの戦い(紀元前 490 年)

→紀元前 483 年 ギリシアで新たな銀山(マロネイア銀山)さらに銀安が加速

→ペルシアは金の流出を食い止めるため、ギリシア征伐へ！

②弱小ギリシア vs. 強大ペルシア

ペルシア戦争(紀元前 490 年)



※サラミス海戦

→ギリシアは銀貨を海軍増強に充てる→雇用増＝失業率の低下へ！

→無産市民(＝貧困層)を軍艦の漕手として雇用

→銀安により流入したダレイオス金貨を使い物資の調達も有利に！

↓↓↓

豊富な資金力と強大な経済力によって、

ギリシアは強国ペルシアに勝利することができた！